

い
し
い
し
ん
じ
Ⅱ
作

植
田
真
Ⅱ
絵

の
ま
い
の
会
系

田
植
の

植田さん

いしししんじい作

植田真二絵

江苏工业学院图书馆
藏书章

絵描きの植田さん

二〇〇三年十二月十日 第一刷発行

作 いしいしんじ

絵 植田 真

発行者 坂井宏先 「編集」鈴木智子＋鎌田怜子

発行所 株式会社ポプラ社

〒一六〇―八五六五 東京都新宿区須賀町五

TEL〇三―三三五七―二二二三(営業)〇三―三三五七―二三〇五(編集)

〇三―三三五七―二二二一(受注センター)

FAX〇三―三三五九―二三五九(注文) 振替〇〇―一四〇―三―一四九二七一

第三編集部ホームページ <http://www.dai3hensyu.com>

印刷 日本写真印刷株式会社

製本 株式会社難波製本

絵描きの植田さん

ブックデザイン 装画
鈴木成一 デザイン室 植田 真

絵描きの植田さんは、二年前、並はずれて器用な一匹の家ねずみのせいで、耳がほとんどきこえなくなった。

アパートの仕事場でイーゼルに向かっている最中、古いガスストーブが不完全燃焼をおこした。消防員があとで調べてみると、煤にまみれたストーブのなかに、焼けこげたプラスチックのせんたくばさみが一つ、燃えていないものが六つ見つかった。せんたくばさみの握りのどれにも、ねずみの力強い歯形が残っていた。ストーブを仮住まいとしていたらしいそのねずみが、どうやってそのなかへ入り、また出ていったものか、消防署員らはただただ首をひねるばかりだった。

病院のベッドでめざめた植田さんは、医者の口が声もなくぱくぱく開くのを見つめながら、

「彼女は？」

もつれる舌でたずねた。

「ソファで寝ていた彼女は、いったいどうなっただんです？」

医者はうつむき首を左右に振った。

三ヵ月後、画材一式とわずかな着替えをたずさえ、都会から遠くはなれた、高原の一軒家にひっこした。

湖沿いの県道をはずれ、すこし森のほうへあがった平台に、その小屋は建っている。木造の平屋で、南向きの窓から湖面が見渡せる。

夏は釣り船や、セーリングボードの鮮やかな帆で、湖水はにぎわう。

真冬は一転し、真っ白な氷雪だけの世界となる。

植田さんは毎朝ベッドから起きるとまず、小屋中央にすえつけられた薪ストーブまきで火をおこす。やかんの水がぬるむと、がらがらとうがいをし、コップの湯にレモンをひと切れ浮かべて、陽のさしはじめた南側の窓辺へ向かう。

がっしりとした木製のイーゼル。みかん箱の脇には水をはったアルミバケツ。水彩紙にはあらかじめアクリル絵の具でオフホワイトの下塗りがほどこされてある。

植田さんは窓の棧さんにレモン湯のコップを置く。

パレットは一枚板にかんなをかけただけの簡素なものだ。青いチューブを力こめてしぼる。絵の具についでだけは、植田さんは昔からけちけちしない。

真っ青な筆先が純白の紙に触れる。一度のためらいもなく植田さんは、画面にちいさな野鳥たちを描きだしていく。真っ青な頭に白毛の腹。画面上でちょこまかと小鳥たちが飛びまわっている。

九時過ぎ、木戸をあけ男がひとり入ってきて、植田さんは振り返らない。男は緑の野球帽をかぶり、これも緑色のジャッケを着ている。顔半分はものすごいひげだ。厚い胸に、ねぎの絵が描かれた段ボール箱をかかえている。

男はすたすたと窓辺へとあゆみ寄り、植田さんの耳のうしろに口を寄せ、とてつもない大声で、植田くん、と怒鳴った。

さっと植田さんは振りむき、そしてにっこりとする。

はくさいだよ。ひげの男は箱のなかみを揺らせながらいう。

植田さんはいねいに頭をさげる。男の顔は真っ赤にそまる。ヤッケから手ぬぐいを出し鼻先をこしごとこすり、何か早口ではなしはじめた。

植田さんは首をかしげ、ひげにおおわれた顔を見つめる。

相手の声は遠くへかすみぼんやりとしかきこえない。しかし、くちびるの動きや表情を見ていれば、たいがいの内容は読みとれるようになった。どうしてもわからないときは相手に大声を求めるか、時間があらずならスケッチブックに書いてもらう。ひっこしてきただ当使っていたスケッチブックは、このあたりに住む人々の寄せ書き帳のようになってしまった。

来週、隣の山荘に誰かが越してくる、とひげ男の口はいつていた。

湖の「向こう側」から来るらしいのだと、彼は不機嫌そうな表情で告げた。

植田さんはあいまいにならずいた。ぶな林の先の山荘は、ずっと廃屋だと教えられたことがある。以前はたしか、外国人の女性が別荘に使っていたらしい。

はなしを終えた男は手ぬぐいを丸めヤッケにつっこむ。

植田さんのうしろから画板をのぞきこみ、ふうと深くため息をついてきびすを返すと、小屋の外へとまっしぐらに出ていった。

軽トラックが県道を遠ざかっていく。おもてのどこかでツグミが二度三度、甲高かんだかい声で鳴く。

そういったものすべて、植田さんにはきこえない。

古びた山荘のほうから響きだしたかなづちや電気のこぎりの音も、画板へと向き直った植田さんの耳に、もちろん届いてはいない。

軽トラックのハンドルを握るひげの男は、近隣では「オシダさん」という通り名で知られ、祖父の代からの菜園をひとりで守っている。

オシダとはそもそも山に生える雄おすのシダ、夏になると胸ほどの高さにまで葉をのぼす、雄々しいシダ植物の一種に付けられた名だ。雌めすのシダ、小さなメシダはこぢんまりと小さく、やわらかな新芽は食用になる。いっぽうオシダの芽は毛むくじゃらで、ごわごわとかく、とても歯がたたない。

おさないころ、オシダさんの農家へ、高名な風景画家が泊まりにきたことがあった。画家はオシダ父の山菜鍋をうれしげに平らげた。数日後、色鉛筆で山を描いたはがきが父あてに届き、父は誇らしげにそれを床柱へ貼った。いまでもオシダさんの宝物である。

オシダさんは植田さんとのつきあいを、口に出してはいわないが、たいそう誇りに思っている。いつか農作業中の自分の姿を、絵に描いてもらえないか、とひそかに願っている。

毎週金曜の夕方、植田さんは駅まで歩いていく。若い駅員にできあがった挿絵を数点手渡し、そのかわり、駅の倉庫に留めおかれてあった自分あての雑誌類、映画パンフレットや本をうけとる。

荷物をしょって植田さんは、いつも同じオレンジ色のレインコートで、湖へのつづらおりの小道をくだっていく。下の県道から見あげると、まるで苔むした石塀を、派手な小蜘蛛がちょこちょこ這いおりてくるようだ。

坂をおりきって、湖岸を西へ二キロほど歩く。白木造りの古い定食屋が見えてくる。がらがらとサッシ戸をあけると、真っ白い髪をしたおかみさんが、あら、いらっしやい、と朗らかに笑う。荷物をおろしながら植田さんもうつつすら笑みを返す。

おかみさんは今年で五十になる。昔々、当時はまだ数少ないフィギュアスケートの選手だった。引退した外国の名選手と、アイスショーで競演したこともある。まん丸く肥えたその体型からは、一見想像もつかない。店のカウンターで天ぷらを揚げているご主人は、もともとダムの飯場の調理師で、金物屋の砥石コーナーでおかみさんと知り合ったという。ほんとうかどうかはわからない。

植田さんは店の奥へ向かい、茶封筒をあけては雑誌を戸棚に積みあげていく。ファッションや音楽に関する雑誌がほとんどで、どの相手とも植田さんは事故に遭う以前からつきあいがあった。彼らからはいまだに挿絵の注文がある。その頻度はゆつくりと、確実に減りつつあった。

手紙で、あなたの絵は災難以降変わりました、といわれたことがある。

ぱっと見たとき受ける印象が、以前とはちがっているのです。あれほどの事故だったのだから、それは当然と思います。うまくはいえませんが、そちらに移られてからの植田さんの絵は、どこかものすごく遠い場所で描かれているような、そんな印象を私はもちます。

いつもありがとうねえ、とおかみさんが近寄ってくる。十代の少女向き雑誌を開いて、あらまた懐かしいものが流行^{はや}っちゃってんのねえ、とつぶやき声をもらす。

植田さんにその声はきこえない。弾むようにはしゃぐおかみさんの口元はちゃんと見え

ている。

自分に送られてくる雑誌類を植田さんはすべてこの店に寄贈していた。古い定食屋の木棚は、まるでそこだけブティックかケーキ売り場のようにはなやいで見えた。女子学生の客がここ二年で急激に増えた。もともと雑誌目当てだった彼女たちも、ご主人の手料理を一口入れるや目を丸くした。いまではカウンターにつき、木の芽和えやとんぶりをおやつにつまむ女学生の姿がひんばんに見られる。

時分どきになるとおかみさんは彼女らに帰るよういった。学生は家で晩ごはんを食べるべきだ、という持論があった。女学生たちが出ていくと、外の物陰で盗み見ていたかのよう、に、近隣の常連客がつぎつぎと入ってきた。別の店みたいだ、とご主人はそのたびに思った。